

◆書評◆

ジョアン・C・トロント著／岡野八代訳・著

『ケアするのは誰か？

新しい民主主義のかたちへ』

(白澤社発行／現代書館発売 2020年 ISBN 978476847982-7 1700円+税)



山根 純佳

(実践女子大学 人間社会学部)

家庭では子育てや介護の時間を見つけることができず、市場化されたケアは低賃金で働く人に委ねられている。この「ケアの危機」の時代に「ケアするのは誰か Who Cares?」。本書は、この問いを誰もが自分の問題として引き受け、望ましいケアのあり方について議論する「共にケアする民主主義」(39頁)へと読者を誘う。第1章は、政治学者ジョアン・トロントがブラウン民主主義賞受賞を機に執筆した講演録「ケアするのは誰か？」(翻訳)、第2章3章では訳者岡野がトロントの思想を解説している。「フェミニスト的なケアの民主的倫理」「新しい責任論」(8頁)がコンパクトに整理された良書である。

第1章では「新しい民主主義」の構想が紹介される。ケアとは「この世界を維持し、継続させ、そして修復するためになす」(24頁)道徳的实践であり、市民が生涯を通じてこの「ケアを共にする」(38頁)政体こそが新しい民主主義の理念である。

ケアする市民は、他者のニーズに関心を向けるゆえに注意深く、配慮するがゆえに責任をもち、ケアを提供するゆえに有能で、ケアを受け取る敏感な市民である。この市民は「ケアに対する責任」(39頁)を平等に引き受け「いかにしてその責任が配分されるべきか」(39頁)を議論する。この議論には、これまで公的領域から排除されてきたケアを受ける人、ケアを実践する人たちも参加し、新しいニーズをもとに、よりよいケアを実現する制度や実践の実現が目指される。

注視すべきは、トロントがこの新しい民主主義によって、市場を財とサービスの配分の最も効率的な方法とみなす「市場第一民主主義」(44頁)による社会的不平等の乗り越えを図ろうとしている点だ。新自由主義におけるケアの自己責任化は、ケアをめぐる不平等を拡大している。中産階級は「自分自身と自分の家族のケア」のために市場をとおして、子ども

に機会と選択肢を与え、また他の誰かのケアを買うことができる。他方、貧しい人たちはわずかな有給休暇と限られた時間のなかで、自分でケアをまかなっている。こうした不平等の是正のためには、「ケア第一の市民」(60頁)による「共にケアするための革命」が必要とされる。この革命は、まず私たちが常におこなっている「ケア活動」の価値に気づき、ケア責任を再考することからはじまる。不平等なケア配分を強化する「私はケア活動に向いていない」「私は仕事で忙しい」「私は自分の家族の世話をしている」「自分自身のことは自分でする」といった言い訳は「免罪符」にはなりえない(54-59頁)。そのうえでケア第一の市民は、身近な職場、学校、教会、クラブに民主的な方法でケアに携わる。こうして真に民主的な社会では「ケアに満ちた生活」、すなわち必要な時には他者からよくケアされ、また自分自身で自分をケアできる、そして他者のためにケアを提供する余裕のある、平等にケアし／される社会が実現される(66頁)。

第2章は岡野によってトロントの研究の軌跡が解説される。トロントの問題関心は、平等を志向するリベラル・フェミニズムの目標や〈差異か、平等か〉のディレンマのなかで、女性が担っているケアの価値をいかに評価するかにあった。この課題を乗り越える「ひらめき」をトロントに与えたのが「他者に対する気遣いや責任」の倫理を論じたキャロル・ギリガンの

『もうひとつの声』である。トロントはケアの倫理を女性の道徳ではなく、ケア活動にかかわる人の道徳と再定義し、市民社会の政治に拡大することを求めた。このケアの倫理の政治化は、道徳／政治、公的／私的という境界線の政治性を問う。たとえばこれらの境界線は、「ケア」を誰かに委ねることで、公的領域の中心にいる者たちが特権を握ることを可能にしている。ケアを最低賃金ぎりぎりで移民に委ねる「無責任な特権者」はまさにその例である。「市民であることから排除されている者たちに、誰がケアを押しつけているのか」(114頁)は、移住労働者にケアを委ねる白人中産階級フェミニズムに対する痛烈な批判となっている。第3章で岡野は、市民権をもたない外国人労働者にケアを委ねる日本社会も、政治的平等からのケア労働者の排除という公私二元論の政治の延長にあると喝破する。「ケア実践から異なりを抱えた人びとの尊重のあり方」を学び「ケアに関わるひとたちの声や要請にしっかりと応えられるしくみ」(152頁)を備えよとの提言と共に本書はとじられる。

以上「新しい民主主義」の提案は、フェミニズムにおける平等論に対して新たな地平を切り開く。フェミニストの「ケアの脱家族化」という目標は、「市場第一主義」に回収されケアの平等を実現しなかった。これに対しトロントが提案するのは、市民みなケアされる人／にかかわる人の

声に傾注し責任の配分について議論する「ケアの政治化」である。このケアを中心にした民主主義論は、ジェンダー、エスニシティ、階層間の平等に取り組む政治理論として高く評価できる。家庭であれ、市場であれ、他者のニーズを察知し何をすべきかを考えるケアの実践なしに、ケアを必要とする人の生活は維持されえない。それにもかかわらず、社会はその担い手の生活を保障する資源配分を怠ってきたのである。

問題はその目標達成のための道程である。トロントがいう私たちが市民として「共にケアする」とはどのようなことなのか。ケアとは具体的個別的な実践であり、特定の他者のニーズを配慮し考える責任を担う人が、あらゆる人に対してケアできるわけではない。障がいのない子をケアしている親が、高齢者介護のことを考えられるわけではないし、障がい児の生活ニーズがわかるわけではない。同様に白人女性が自分の子のニーズのために低賃金の移住労働者を雇う、もしくは自分は子のケアに専念し家事労働をナニーに委ねるとき (Elden and Anving 2019)、そこにある権力関係や移住労働者の置かれた脆弱性に想像力が及ぶわけではない。白人中産階級の女性がケアを貧しい女性

に委ねて平等を実現する「フェミニストの悪夢」(85頁)は、「ケアする市民」が非現実的であることを物語っている。

それでもトロントは社会には「多くのタイプのケアが存在している」(61頁)として「ケアの価値」に希望を託す。犬の散歩、病院での介護士、料理人、教師、結婚プランナー、自動車整備まであらゆることがケア実践にかかわっているのだと。しかしこのような広いケア概念によって、私たちが失うものはなんだろうか。示唆的なのはトロントが、フェミニストが手に入れた「ケア労働」という概念を手放しケアの価値を再考しようとしている点だ。労働概念には、その労力が評価されるべき、または支払われるべきという規範的な力がある。たとえばエヴァ・キテイは、他者からのケアがなければ生存が危ぶまれる存在に向けた労働を「依存労働」と呼び、依存労働者の脆弱さの保護を平等理論の目標に含める (Kittay 1999)。ケア労働の配分に対する母親たちの異議申し立てや、ケア労働者として正当な賃金を求める運動など「ケア労働をめぐる政治」こそが、あるべきケア配分を再考し、平等にケアする／される社会の実現に向けた近道ではないだろうか。

## 参考文献

- Kittay, E. F., 1999, *Love's Labor: Essays on Women, Equality and Dependency*, New York and London: Routledge.
- Elden, S. and T. Anving, 2019 Nanny care in Sweden: The inequalities of everyday doing of Care, *Journal of European Social Policy*, 29(5) 614-626,